

『トム・ジョウズ』の一面

——その「愛」の質と方法をめぐって——

山 本 和 平

ひとたび社会秩序が確立され、社会の機能が慣習化され、自由な人間的活動がそれによって阻まれる時、そうした秩序への反抗のなかにこそ人間が人間的、すなわち主体的でありうる。しかも、反社会的な行為としての恋愛において最も人間的でありうる。したがって本来的に人間的たらしとするすぐれた作家たちが、恋愛をそのテーマとしてきたのは偶然ではないこと、こうしたことはすでにぼくらの文学的常識となっている。

こうした近代文学の常識から、『トム・ジョウズ』をながめるとどういうことになるか。評価は必ずしもかんばしいものにならないことは確かである。トムは恋する男だろうか。ソファイアは恋する女と言えるだろうか、という疑問が忍び起ってくる。

むしろ、作者フィールドینگは、『トム・ジョウズ』を恋愛小説として書いたつもりはない。愛の情念の展開する劇をここに期待するのは誤りである。作者の意図したのは、「人間性」のさまざまな相を照らしだすこと（‘The provision which we have here made is no other than HUMAN NATURE.’ BK. I, ch. 1）であって、二人の愛もその一部であるにすぎない。にもかかわらず、少くともストーリーが、二人の愛の転変を基軸にしていることは事実である。したがって、二人の愛の在り方、それと関聯する描写の方法を調べてみることで、この作品の特質をほぼ捕捉しうるのではないかとおもわれる。断っておくが、冒頭で述べたような意味の「愛」がここに実現されていないからといって『トム・ジョウズ』の価値を必ずしもおとしめるものではないということである。孤独な反社会的な形においてしか、愛を、自己を実現しえないという歴史的な状況はまだ十八世紀にはなかったという点を認識すれば足りよう。

Arnold Kettle は “An Introduction to the English Novel” のなかで、『トム・ジョウズ』の主題は「トムとソファイアが、ブライフィルの性格のなかに象徴されているコンベンショナルな社会にたいして闘うことだ」といっている。（“……Tom and Sophia fight conventional society, embodied in the character of Blifil.” P.78）

ブライフィルは、地主オールワース氏の妹であるブリジエットの息子、およ

そ作者の否定的な対象となっている。すなわち、作者の人間把握の基調は、「見せかけ」(‘pretence’)と「真実」(truth)とを見破ることであるが、(そして、ここに「喜劇」の成立する契機があるのだが)ブライフィルは、「見せかけ」の具体化なのである。Kettleが「ブライフィルの性格のなかに象徴されているコンベンショナルな社会」というとき、「真実」なる行為を圧殺するところの、ソフィスティケートされた社会、「見せかけ」の支配する社会を、少くとも意味していると考えてよいだろう。トムとソファイアの関係をはきさき、トムをオールワージの「パラダイス・ホール」から追放し、トムは実はブリジエットの実子であることを告げる遺書を隠匿して彼らの再会をおくらせ、金欲のためにソファイアを手に入れようとする、首尾一貫したエゴイズムは、「コンベンショナルな社会」の象徴といつてよいだろう。

しかし、Kettleのいうように二人はそうした社会にたいして斗ったのであろうか。問題は、作者が彼らの愛と斗いをいかにえがいているかである。その描き方の中に、彼らの愛と斗いの質があきらかにされるだろう。

トムは、natural man (これが、18世紀の理想的人間像であることは断るまでもあるまい)として登場し、終始、ブライフィルに象徴されるところの、邪悪な、Human Natureのパタンの対立像として描かれている。ソファイアは、オールワージの財産の正統な相続者たるブライフィルの求愛の手を拒否して、捨て子のトムにより好意をむけることによって、彼女のgood-natureをあきらかにする。ソファイアの心が次第にトムに傾いていったのは、一連のトムのheroicな、gallantな行動であるが、作者はそれを次のように書いている――

Many accidents from time to time improved both these passions (—— some little kindness for Tom and no little aversion for his companion, Blifil ——) in her breast; which, without our recounting, the reader may well conclude…… (BK. IV, ch. 4)

(折々起る幾つかの出来事が彼女の胸中の二つの気持——トムへの好意とブライフィルへの嫌悪——を更に募らせた。それは我等が一々語らずとも、読者自身お察しであらう。)

作者はここで、彼女の内面にたちいることを慎重にさせて、読者の想像と常識にまかせていることに注意しよう。それは、彼女がトムと村娘モリーとの深い関係を知ったときも同様である――

This incident relating to Molly, first opened her eyes. She now first perceived the weakness of which she had been guilty; and though it

caused the utmost perturbation in her mind, yet it had the effect of other nauseous physis, and for the time expelled his distemper. (BK. IV, ch. 12)

(モリーの事件に始めて彼女の眼は醒めた。彼女は始めて我が犯せる過ちに気付いた。それは彼女の心をひどく動揺させたが、同時に他の嘔吐を催させる薬と同じ利目があり、一時彼女の恋の病を退散させる力があつた。)

これは心理描写ではない。極めて正確ではあるが概括的な、心理状況の説明である。「彼女の心のひどい動揺」は、感情の動きにしたがつて具体的に説かれてはいない。なるほど、物語^{ナラティブ}というものの要求するひとつの条件であるスピードはある、だがもうひとつの条件である具体的な現実性を欠いている。こうした一般的な説明は、したがって、内容にリアリティを与えるために他の方策を必要とする。この場合それは比喻である。かくして、精神と肉体との類比が導入されてこねばならない。“The diseases of mind do in almost every particular imitate those of the body……without which our descriptions must have been often unintelligible.” (心の病も殆んど一々の細部に至る迄肉体の病にならうもの……それを用いずしては我等の敘述は意味を捕へ難いものになつただろう)しかし、比喻も所詮説明にすぎない。次もその一例――

That passion, which had formerly been so exquisitely delicious, became now a scorpion in her bosom. she summoned every argument her reason could suggest, to subdue and expel it.

(嘗てはいみじくも甘美だつた恋の心が今では彼女の胸を嚙むさそりとなつた。されば彼女は全力を揮つてそれに抵抗し、又彼女の理性の思いつくりの論理を駆使してそれを抑え又追払おうとした。)

恋心と背中あわせになっている嫉妬を「さそり」に喩え、ソフィアは理性の力でそれに抵抗しようとしているという――しかし、ここからぼくらは彼女の感情の現実性^{リアリティ}を感受することはできない。彼女の苦悶の声も、表情も読みとはできない。作者は彼女の内面に展開されているはずの情念の嵐をうつしだるこすことは一切省略して、ただ外から、彼女は嫉妬に抵抗し追放しようとしたと説明するだけである。

個人の行動を描写するにあつてのこうした一般化、概括化は、トム及びソフィアの愛情の關係の性質と緊密に結びついているのだ。結論から先に言つてしまえば、二人の關係はロマンスの世界の關係に酷似しているのである。作

者フィールディングの想像力は、二人の関係を設定するにあたって、当時の現実のうちから、そして現実のなかに、二人を造形するというよりはむしろ、フィールディングの夢想する恋人たちを描いたといわねばなるまい。そしてそれは、情念の内面劇には、周到にそっぽを向くことによって、一般的概括化によってのみ果されたのである。

では、行動を敘述するにあたっての一般的概括化（あるいは人物への外面的アプローチ）とロマンス風な愛情の質、そしてトムの natural man としての性格化とがいかに結びついているかを具体的に調べてみよう。

まず、恋の発端はお互にどのように意識されたか。ソファイアについて――

The generosity of Sophia's temper construed this behaviour of Jones into great bravery; and it made a deep impression on her heart: for certain it is, that there is no one quality which so generally recommends men to women as this. (BK. IV, ch. 13)

（ソファイアは寛大な心ばえにかかるジョウンスの行動を彼の大勇の所為と解釈し、それだけに深い感銘を受けた。由来勇敢という事ほど女性をして男性を尊敬させるものはない。）

自らは腕を骨折してまでソファイアの落馬の危険を救ったトムが、彼女の心に「深い感銘」を与えたというが、その「感銘」がどのような性質のもので、表情なり行動なりに具体的にどうあらわれたかの説明は一切抜きにして作者は、急いで、その「感銘」の正当性を抽象化し一般論のなかに解消してしまうのである。したがってここからぼくらが読みとる印象はといえば、作者は人間の心理機構のアクチュアルな運動を開示することには興味がなく、むしろ、そこから抽象されてくる一般的命題のもつ断定の強みを誇示し押しつけているように受けとれるのである。これは、フィールディングのリアリズムの特徴であり、また限界といわねばならない。なぜなら、リアリズムの大前提はまず具体的な、アクチュアルな相において対象を把えることなのだから。

ところで、トムの如上の行動及びそれにたいするソファイアの反応のなかにロマンス的世界を嗅ぎとつても誤りではないだろう。これについては後述するが、ソファイアは lady でありトムは彼女に忠誠を誓う knight といった関係がここにある。作者がはたして意識的にそういうロマンス的關係を設定したのかは推測の域をでないが、ソファイアは「感銘を受けた」と敘したすぐ次に、「由来勇敢という事ほど……」とその「感銘」を一般化によって正当化した時、騎士物語のパターンが彼の脳中に浮んでいたことは確かである。

ところで一方トムはどうか。はじめてソファイアの愛情に気附いた時、運悪

く村娘モリーとの問題に悩んでいる。おおげさにいえばこの時トムは、モリーに象徴される自然的な愛とソファイアに象徴される精神的な愛との二者択一の、分裂の、危機にたっているわけである。ソファイアに愛されていることを突如発見したトムは心に動乱 ('perturbation in his mind') を経験した、と作者はいう。モリーへの道徳的責任とソファイアへの純粋な愛の相剋、予想されるソファイアの父の反対。こうした状況において珍らしくトムは想像(内面劇を展開するモメントである)をめぐらす。恋は人を分析家にするものである。しかし、このトムの想像も彼の内面の懊悩のリアルな軌跡とは必ずしもいえない。たとえば、次のように。ソファイアの父はトムに友情をもっていることを彼は知っている、しかし自分は捨児でありソファイアは財産のある地主の娘だ、そこで――

(A) He knew, that fortune is generally the principal, if not the sole consideration, which operates on the best of parents in these matters:

(B) for friendship makes us warmly espouse the interests of others; but is very cold to the gratification of their passions.

(C) Indeed, to feel the happiness which may result from this, it is necessary we should possess the passion ourselves.

(D) As he had therefore no hopes of obtaining her father's consent, so he thought…… (BK. V, ch. 3)

(A) こういう問題になれば、財産というものが普通どんな立派な親をも、左右する唯一のものではないまでも第一の考慮であることを彼は知っていた。

(B) 友情が相手の利益を熱烈に希求させることはあっても、相手の情熱を満足させる事には、友情は冷淡なものである。

(C) 情熱の満足から来る幸福を実感するためには相手と同じ情熱をこちらも持っていることが必要なのだ。

(D) それ故父親の同意を得る望みはなし……と彼は考えた。

(A) の部分の内容は、natural man であるトムの思考内容としても少しも不自然ではない。しかし、コロンで連結された for……以下の説明の部分、この

(B) の部分は、トムの自身の思考内容というよりは、作者の抽象的な、一般的な思想である。文の構造の点からいえば、前の that-clause に従属する。すなわち、トムの「よく知っていた」内容の一部になっているのだが。次の (C) は明らかに一般論で、フィールディングの包懐する Human Nature の一面を語っている。したがって主人公トムの思考内容ではない。本質的に natural な

人間の役割を課されているトムがこうした一般化しうる能力をもちうるとは考えられぬ。(トムの性格に関して、第三卷第三章で 'wantonness, wildness and want of caution' といっている)。ところで (D) の部分の 'therefore' に注意しよう。この therefore によって前の部分、作者自身の一般論が、あたかもトム自身の思考内容であるかの様に結びつけられてしまうのである。'therefore' は (C) の一般論を指し、(C) を思考した結果が、「父親の同意を得る望みはなし……」という結論に達し、そのあげく、「彼は……と考えた。」というふうに。少くとも文の構造はそうようにできているのだ。

これは些細な問題ではないはずである。ここでは、作者と作中人物との視点が、いわば容易に相互と交替しうる、あるいは両者が未分化な状況にあるということの意味している。登場人物にぞくするアクチュアルな思考過程の記述と、それに関聯し、またそこから抽象される一般的陳述とが、見方をかえて換言すれば、「小説」と「エッセー」とがいまだ明瞭に分化しきらない状況である。またこうも言える。作者は人物を内面的な性格描写によって造形するよりもむしろ、一般論によって説明している、と。

読者が作品に期待するのは、いうまでもなく論理化された一般的規定ではなく、豊富な、雑多な、現実性である。その現実性の中においてこそ想像力は、それを素材にし消化し組織するという自由な運動をおこなうことができるのだ。したがって、アクチュアリティを捨てて一般化に赴くことは、リアリズム文学としては不徹底の感がするものも当然である。

ところで、こうした傾向——人物の現実態において自らに語らせ行動させる事なく、いわば作者が外から一般論の助け船をだすやり方——は、Fortune(運)の導入という、この作品にしばしばみられる一種の問題解決の手段と、本質的な共通点をもっている。たとえば、トムの「心の動乱」は、以後、トム、ソファ、モリー三者の間でなんら現実的な斗いを発展させることはない。モリーにたいする道義的責任は、うまいことに、スクウェアの予期せぬ導入によって解除されてしまう(モリーはスクウェアの情婦であることの発見によって)。いわばこの際スクウェアは deus-ex-machina といっていいだろう。

むしろ、自称哲学者スクウェアとモリーとの濡れ場をモリーへの道義的責任に悩むトムに見せつけることはただ単にトムから責任を免除してやる働きをしているだけではない。この場面においては、むしろ、それは二次的なものであって、この喜劇的な「発見」のシーンは、自称哲学者スクウェアの偽善の曝露に焦点があわされている。つまり、トムの深刻な良心の問題がそれ自らの矛盾の発展として展開され解決されるのではなく、トムの内面とは離れた動因の導入によって、その「深刻さ」を笑いで一挙に打ち砕き、あるいは、はぐらかしてしまうのである。むしろぼくら読者は、思いもかけぬスクウェアの正体の喜劇

的曝露に腹を抱える。けれど、トムの良心の悩みがこのような形で慰撫されてしまうことに不満を感じる。ほんとうにそれは問題の解決といえるのだろうか。ぼくらに判然と見えるのは、作者の喜劇作法の熟練した腕だけだ。ここで小説家フィールディングの前歴が才気溢れた喜劇作家であったことを想いだしてもいいだろう。そして、ここに、「喜劇」と「小説」とがまだ分化しきらない、あるいは小説が喜劇固有の手法から脱しきらない状況をみることもできよう。

以上要約して、この小説の依拠する手法はこの「喜劇」と、さきにのべた「エッセイ」——「人間関係の喜劇的描出」と「内面心理の抽象的概括化」ということができよう。

本質的に good-natured な彼らのロマンス風な愛と斗いが展開されるのも、この二つの手法によってなのである。たとえば第五巻第六章は、その一章に、この特徴がすべてでている。お互に相手の恋心を見抜いたとき、女の方には「敬意と憐れみ」の心が萌すものであり、男の方は女の姿が見えたりすると、「顔中が真赤になり」「溜息がもれる」ものだ、などと一般的にのべたあと、彼らの出会いをロマンス風な会話で（「ああ、お嬢さん、僕に生きていと仰しやるのですか。そんな意地悪い事をお考えなのですか。」……「いえ、あなたの神様のような性質、神々しいほどの善良さ……」という具合に）敍した後コミックな筆致で二人を別れさせる。「かくて若い二人はふるえつつヨロヨロ歩いて行った……」というふうに。

さて、敍上の分析から、作中人物たちがどのように描かれるか、物語がどのように展開されるかを見た。本来人間の内面と外的事実との相剋のうちに最もその本質をあらわす「愛」の相を、いわば全能の作者の巧妙な操縦の手に帰属せしめているのだ。

ぼくは、先に彼らの愛の質をロマンス的だといった。ロマンスはここではリアリズムへの対立物を意味しているのだが、以上のべたような、「概括化」と「喜劇化」という表現手法のもつ小説のリアリズムの不徹底性ととともに、それになたて表現される愛の質そのものがロマンス的であることも、作品のリアリティを不足させる理由になっている。

トムがオールワージ家を追放され、ソファイアとの別離を余儀なくされ、ここから作品の第二の部分ロンドンへの途上での adventure がはじまるが、この別離に直面してトムは、「激烈な苦悶のさまで髪をかくむしたり、その他狂気、激怒、絶望的の発作に一般に伴いがちのさまざまな動作を見せ」たが、結局「名誉心(honour)に絶望が加勢し、恩人への感謝の念、愛する人への真の愛、すべてが一つになって、燃えあがる慾望に打ち克った。ソファイアを追求してその身を破滅に至らしめるよりはむしろ彼女を思切ろうと彼は決心した。」honour が慾望に克ったという、honour へのこうした強調の中に、ロマンスの

一因子を見ることができる。(詳細は別にゆずるが、トムが作者によって担わされている性格は、a man of honour であり、また a good-natured man である)。

ソファイアへのトムの homage は、この adventures の部分を通じて不変である。knight がその lady にたいする関係、ロマンス的な関係は、次のようなトムの語法にはつきりうかがわれる——

Oh, Miss Western……Can you desire me to live? Can you wish me so ill?……Oh! I know too well that heavenly temper, that divine goodness which is beyond every other charm. (BK.V, ch.6)

Oh! Sophia, how easily could I drain my veins to preserve one drop of that dear blood……O speak to me, Sophia, comfort my bleeding heart. (BK. VI, ch. 8)

Oh! My Sophia, did you know the thousand torments I have suffered in this long fruitless pursuit. (BK. XIII, ch. 11)

Oh! My Sophia, am I to hope for forgiveness……O! My Sophia, do not doubt my sincerity of the purest passion that ever inflamed a human breast. (BK. XVIII, ch. 12)

この小説における彼ら恋人たちの出会いは四回あるが、そのすべてが、“Oh! Sophia” という感嘆詞に伴奏された同一の主題(かわらざる愛の誓いの表白)で満たされているのだ。

Adventures の部分においてトムはおよそ、Sophia にたいして変らざる愛を抱いているとは思えぬようなあやまちを重ねる。したがってそのままのなり行きにまかせれば到底トムをソファイアに結びつけることは不可能で、この「ロマンス」は悲恋に終らざるを得ない。ソファイアは運命を自らの手で打開する努力を決して試みることなく、“Fortune may, perhaps, be sometimes kinder to us both than at present.” を祈っているだけなのだから。

その‘Fortune’がついに彼らに微笑みかけるのである。トムとソファイアをへだてていたいくつかの障害がとりのけられる。Mrs. Miller という証人がトムの heroic な honourable な行為を賞讃する。そこで Mr. Allworthy の怒りはやわらぐ、またトムは、実は Mr. Allworthy の姪 Bridget の長男であること、したがってオールワース家の財産の継承者であることがブリジエットの遺書の発見によって判明する。そこで、身分違い故に反対していたソファイ

アの父も叔母も一転して賛成の側にまわる。またトムは例の調子で、心から自分の愚行を悔いていることを信じてくれとたのむと、ソファイア答えて、「証明は時にしてもらいましょう。ジョウズさん、あなたの境遇（‘situation’）はいまは変りました。変ったことを私は大変喜んでいますが……」という。むろんやがて彼女は彼の真摯さをみとめるだろう。だがトムの‘situation’が変らなかつたら……彼女は依然として Fortune を待っているにちがいない。

Fortune が導入されて、二人を結びつけるのであって彼ら自身の努力の、斗いの結果ではないことは明瞭である。トム・ソファイアと同じ地主階級の一員であることが発見されなかつたら、この物語は結着がつかなかっただろう。なぜならソファイアを捨児トムと結びつけることによって‘ruin and misery’にたたきこむことは作者に想像できないことであつたし、そうすれば、‘romance’のわく組をうち破ることになっただろうから。

こうした結着のつけ方の中に、Watt は作者の conservatism を指摘している（“The Rise of the Novel”, pp.269—70）が、むしろそれは、作者が構想した‘romance’的な愛の当然の帰結といった方がいい。

このようなわけで、冒頭に引用した Arnold Kettle の評価“Tom and Sophia fight conventional society”はいささか過大評価といわねばならぬ。彼らは拒否はしたが斗いはしなかった。Fortune の介入によって彼らが迎え入れられたのは‘conventional society’に外ならなかつたことがこれを物語っている。

以上、『トム・ジョウズ』におけるトムとソファイアの「愛」の質を「概括化」と「喜劇化」という二つの表現の方法において考察し、‘romance’的なものをそこに見てきた。いうまでもなく、これは、ふつう Fielding の「リアリズム」といわれるものの限界を暗示することになるが、「近代的」な意味における恋愛が小説に登場してくる十九世紀小説のリアリズムとの質的差異、及び、その要因如何、という問題を提起するだろう。

（註記：訳文は朱牟田夏雄氏訳岩波文庫版を借用させていただいた）